

保育者養成における体験学習の研究 — 「保育内容総合演習」の実践を通して—

関崎 哲
新山 順子

A Study on the Practical Lessons of Child Care Students;
The Practice of “Integrated Exercise of Child Care Programs”
Satoshi SEKIZAKI and Junko NIYAMA

要約

本研究は、先行研究である「保育学生の自ら学ぶ力を養成する体験的授業の可能性」（岡山県立大学短期大学部研究紀要第10巻・2003年）の研究成果に基づき、「保育内容総合演習」の授業について、内容の再検討と修正を加え実施したものの報告である。また、本研究の結果が、今後更に「保育内容総合演習」の授業の充実に役立つよう、実施内容の分析と考察を行うとともに、ここ数年にわたるこの授業に関わる研究結果をまとめるという意味から、このような参加体験型学習の今日的な意味を明らかにしようと試みた。

キーワード：保育者養成、保育内容総合演習、体験学習、ワークショップ

1. はじめに

今日、この授業でねらいとしている「自発的な体験学習」「総合的な学習」は、その重要性が認識され、養成校等で様々な取り組みがなされている。本学でも、「保育内容Ⅱ（総合表現）」や、本研究で対象としている「保育内容総合演習」、さらに「総合演習」「教職総合演習」という科目を実施している。そもそも、“総合的な学習”というものは主に、小学校など初等教育の現場から始まり、中学・高校そして高等教育の場である大学にまで広がってきた。これはそのまま各々の教育の場で、子どもたちあるいは学生たちの、実体験の不足、主体的な学習態度の欠如、知識や経験を総合して問題を解決していく力の弱さ等が指摘されたためである。そして、教育する側のこのような取り組みは、実施から年を経るにつれて、各々の教育の場において成果を上げて来ている。

本学における「保育内容総合演習」の開設の経緯や授業内容については、先行研究である「保育学生の自ら学ぶ力を養成する体験的授業の可能性」（岡山県立大学短期大学部研究紀要第10巻・2003年、以下“先行研究”と記す。）で詳しく報告し、この授業の保育者養成課程における意義や、教育効果について明らかにした。学生たちの、実体験の不足、主体的な学習態度の欠如、知識や経験を総合して問題を解決していく力の弱さ、と言った問題点は、「自発的な体験学習」「総合的な

学習」をねらいとした「保育内容総合演習」という授業を経験することによって、完全に改善されるとは言えないまでも、改善する兆しは、確実に見えてきている。本研究ではこの先行研究の成果を踏まえ、内容の再検討と修正を加え、あらためて実施した授業について報告し考察を行う。

2. 保育内容総合演習」における新たな試み

(1) これまでの実践からの反省

「保育内容総合演習」という授業は、平成8年のカリキュラム見直しにあわせ、保育内容に関する各論の授業（「保育内容・健康」「保育内容・環境」「保育内容・人間関係」「保育内容・言葉」「保育内容・表現」）から得た知識を、生の体験活動を通して総合的な視点から再構築して行くことを目指して新設された。授業の具体的な内容は、日常生活における学生の体験の質の変化や、本専攻の授業では学外での直接的な体験活動により学ぶスタイルの授業がないなどを考慮し、1・2年合同で、学外施設に学習の場を設定し、学生自身が企画・運営するワークショップの形式で進めるというものである。

先行研究では、主に平成11年度と12年度に実施した内容についてその実施内容を報告するとともに、参加学生が記述したレポートの分析によって、学生の学びの状況と問題点を明らかにした。そこでこのレポートの分析は、レポート中の記述を、「自分達の企画したワークショップについて」「参加したワークショップについて」の二つの観点から、各々「反省と課題」「喜びと達成感」「協力と交流」「気づきと理解」のカテゴリーに分類し分析と考察を行なった。その結果、このような“学生が自ら参加・活動する”体験的なスタイルを特徴とする授業では、自分たちで実践することや他者の実践に参加することを通して、単なる達成感にとどまらない「主体的に課題や問題を発見すること」や「問題解決の喜び」などが効果的に学習されていることが明らかになった。

しかし、それと同時に、いくつかの改善されるべき問題点も明らかになった。この授業は平成13年度まで5回実施されており、その度ごとに幾つかの、内容や実施形態、場所、担当者の変更を行いながら、内容の充実をはかるための修正を加え実施されてきた。あらためて、「学外・野外といった環境を生かしたでの活動」「学生自身が、指導する側・される側を各々経験する活動」といったこの授業のねらいが達成されているかという観点から考えると、まだ十分とは言えず改善すべき点が見られた。この改善すべき点を具体的に整理したものは以下のとおりである。

- ①授業が、学内での事前学習・学外での体験学習と授業の場が変わること、1・2年合同でしかも幾つものグループに分かれた活動であること、複数の教員が担当し指導に当たること、などの理由により、授業内容が複雑で授業全体の見通しが、学生にとってわかりにくいものになっている。
- ②学生のグループ別けに問題があり、確実に全員が指導する側・される側の両方を経験するということにはなっていない。
- ③前年の経験が次の年の活動に効果的に生かされているとは言えない。
- ④ワークショップという形式の学習に参加した経験のない学生がおり、自分たちが企画指導すると

言うイメージがなかなか湧いてこない。

⑤授業の分析の方法をより客観的・具体的にしていく必要がある。

以上のような問題点は、今後授業自体の充実を図るために改善していく必要があると同時に、この授業による経験がきちんと学生の中に定着し、学生自身が幼児教育の実践の場で生かすことができるようになるために、解決しなければならない問題だと言える。

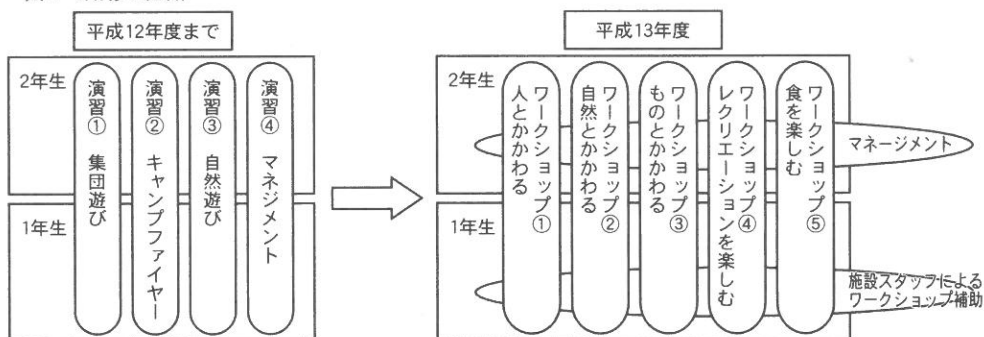
(2) 平成13年「保育内容総合演習」における改善点

平成13年の授業実施に向け、前章でまとめた問題点を解決するための工夫を行った。

①の、授業内容が複雑で授業全体の見通しが学生にとってわかりにくい、という問題点については、担当する教員を少数にし、授業の内容やねらい方法が学生に徹底するようにした。また、ワークショップの分野（カテゴリー）を、「人と関わる」「自然と関わる」「ものに関わる」「レクリエーションを楽しむ」「食を楽しむ」の、5分野に固定し、各々のワークショップの活動内容をわかりやすくして企画や指導を学生自身が行いやすいように変更した。

②の、確実に全員が指導する側・される側のを両方経験するということにはなっていないことについては、これまで授業の活動全体を管理・統括するために“マネジメント担当”として1つのグループを置いていたが、これではそのグループに所属する学生が、ワークショップを企画し運営するという活動を行うことができないことが問題であった。そこで、図1に示すような組織の変更を行った。マネジメントを行うグループをなくし、マネジメントの役割を各ワークショップのグル

図1 活動の組織



ープの中の2年生数名が分担して担当するというようにした。こうすることで、この授業に参加した学生全員が等しく、「自分たちで実践すること及び他者の実践に参加すること」を経験できるようになった。また、1年生に対しては、各ワークショップのグループの中から数名が分担して施設スタッフによるワークショップの補助を担当するというようにし、ワークショップを企画し運営するということについて経験できる機会を作った。

③の、前年の経験が次の年の活動に効果的に生かされていないことについては、実施年度の反省

が次の年に確実に生きるように、参加した1年生がその経験を生かして次年度に新しい1年生をリードしていくといった、1と2年生との理想的な関係が実現できるよう、継続して同じ施設を利用することにした。また、活動をやり放しにするのではなく、成功や失敗が確実に次に生きる経験となるために、ワークショップを行ったその場で、反省会を実施することにした。

④の、ワークショップという形式の学習を経験していない学生がいる、という問題については、この授業の受け入れ施設のスタッフによるワークショップを積極的に活動に加え、専門の担当者が実施するワークショップを、学生が観察・経験する機会として利用することにした。施設のスタッフによるワークショップは、そうした活動を専門にしている、いわばプロの指導による活動である。ワークショップを自分たちで企画・実践する経験を経た学生たちにとって、施設のスタッフによるワークショップの活動に参加し、彼等の指導の様子を観察することは非常に意味があると考えたからである。

⑤の、授業の分析の方法をより客観的具体的にしていくことについては、授業終了後に提出させるレポートに加えて、アンケートを実施することにした。アンケート内容は、以前のレポート分析の経験を生かし、「自分達の企画したワークショップについて」「参加したワークショップについて」の二つの観点から「学習意欲、参加度」「交流と協力」「活動の成果、達成感」「援助方法」の項目について参加学生全員にその満足の度合いを調査するものとした。

このような変更の後に実施された授業は、ほぼねらい通りの成果を上げたと考えている。次項では、授業実施後のアンケートの集計結果と分析、そしてその中の1つのワークショップの様子を、学生の学びの観点から見てみたい。

表1 平成13年度ワークショップ活動内容

ワークショップ名	内 容
人とかかわる	「伝承遊び」メンコ、缶ぼっくり、竹馬、羽根つき、まりつき これらを一通り体験した後、障害物競争に構成し遊ぶ
自然とかかわる	「ウォークラリー」各ポイントで、①虫かごと望遠鏡作り②虫とり③歌って踊る④捕った虫の絵を書く
ものとかかわる	「造形遊び」ポリ袋を使って大きなバルーンを作る
レクリエーションを楽しむ	「キャンプファイヤー」キャンプファイヤー、コミュニケーションゲーム、ダンス
食を楽しむ	「野外炊飯」 エーゲ海鍋、コーンライス、てんぐさゼリー
*施設スタッフのワークショップ	備前焼き（てびねり）体験

3. 実施内容の報告

(1) 平成13年度実施内容

これまで述べたような改善を加え、平成13年度に「保育内容総合演習」として実施したワークショップおよび活動内容は、表1のとおりである。授業全体の進め方は、これまでどおり、まず事前学習として、1・2年生が各々10人ずつ20人で5つのワークショップを指導するグループに別れ、自分達の行なうワークショップについての資料収集と運営・援助方法の検討を行う。次に学外での実習として、自分達の企画したワークショップを主催・実行するとともに、他のグループの行なうワー

クシヨップへ参加する。そして、事後学習・まとめとして、アンケート記入、反省と意見交換・レポート作成を行うというものである。

(2) アンケート結果

参加学生に対して行ったアンケートは、表2に示したものである。「自分達の企画したワー

表2 アンケート項目

1. 学習意欲・参加度	●積極的	●やや積極的	●普通	●やや消極的	●消極的
2. 交流と協力	●とてもあった	●あった	●普通	●あまりなかった	●なかった
3. 活動の成果・達成感	●とてもあった	●あった	●普通	●あまりなかった	●なかった
4. 援助方法	●適切だった	●まあまあ適切だった	●普通	●あまり適切ではなかった	●適切ではなかった

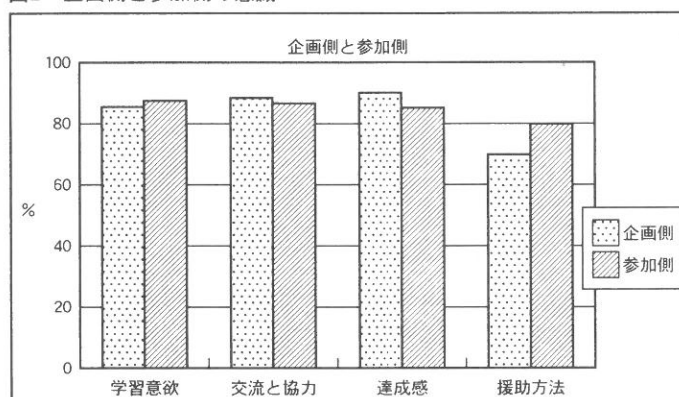
クシヨップについて」「参加したワークシヨップについて」の二つの観点から、「学習意欲、参加度」「交流と協力」「活動の成果、達成感」「援助方法（援助方法の適切さの度合い）」の4項目について、その満足の度合いを5段階で記入してもらう方法で調査した。アンケートは、各々のワークシヨップが終了するたびに、企画指導した側、参加した側双方に対して行った。

アンケート結果の集計は、各項目の回答5段階を良い方から4、3、2、1、0のポイントとして集計し、全員が4ポイント入れた場合のポイントを満点として、それに対して実際の記入ポイントが何%になるかという方法で行った。

アンケートの分析により、詳細な学生の学びの様子がわかってきた。特に、企画側と参加側の意識の違いや、1年生と2年生の学びの様子の違いがはっきりと見られたことは非常に興味深い。これは、前年までのレポートによる分析でも見られたことではあるが、今回のアンケート調査によりその傾向が具体的に確認できたと思う。

図2「企画側と参加側の意識」のグラフで見られるように、企画側と参加側双方の意識を比較してみると、「学習意欲」「交流と協力」の項目では双方に大きな違いは見られないが、「達成感」

図2 企画側と参加側の意識



では企画側が高く、「援助方法」では参加側が高くなっている。これは、企画し実行したことにより大きな満足感が得られているということ、企画した側の学生達が自分たちの援助方法に対して客観的にとらえようとする態度が養われていることの表れだと見ることができる。

図3 学年別企画者の意識

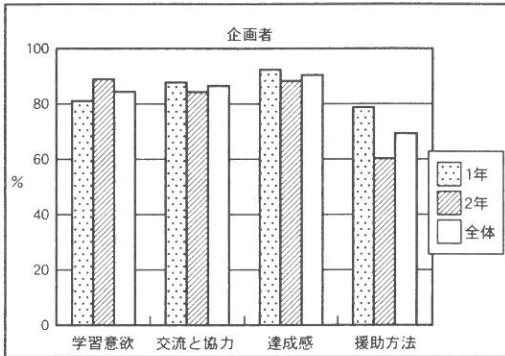
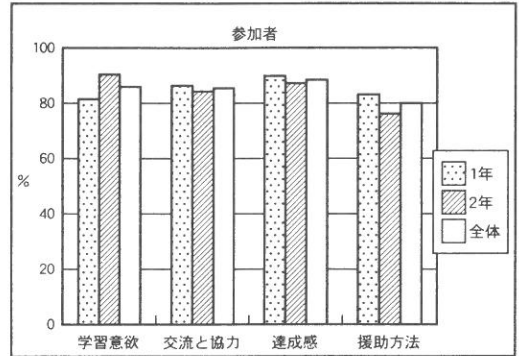


図4 学年別参加者の意識



次に、企画側と参加側双方の意識を学年別に見てみたものが、図3および図4である。企画側、参加側どちらからみても「交流と協力」「達成感」の項目においては1、2年の違いはあまり見られず、全体として「交流と協力」はできており、「達成感」も得られていると考えられる。しかし、「学習意欲」「援助方法」の項目においては1、2年の間で若干の違いが表れている。企画側、参加側双方で「学習意欲」は2年生の方が高く、「援助方法」においては、2年生が低くなっており、特に企画側で見た場合、1年生と比較するとかなり2年生が低いことがよくわかる。これは、単に指導がうまくいかなかったということを表しているのではない。指導される側に回ることの多い1年生と、自分達の責任で指導していかなければならないということを十分意識して活動に取り組んだ2年生との、この授業に対する取り組みの態度の違いが表れたものとして理解することができる。

図5 ワークショップ「ものとかかわる」における企画側・参加側の意識

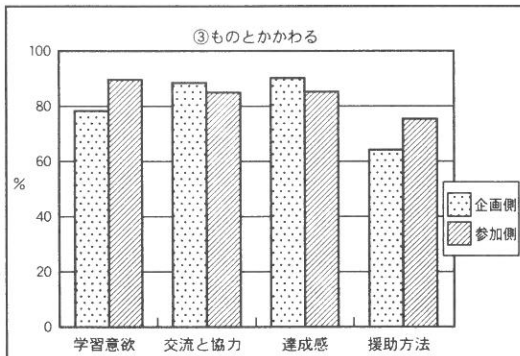
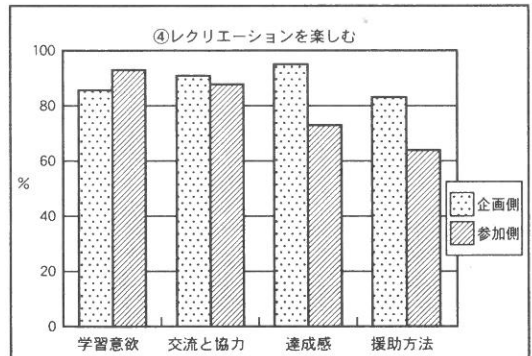


図6 ワークショップ「レクリエーションを楽しむ」における企画側・参加側の意識



5つあるワークショップごとの企画側、参加側の分析では、ほとんどのグループにおいて、図5のように、満足の度合いは、「学習意欲」と「援助方法」の項目で参加側が高く、「交流と協力」と「達成感」の項目では、企画側が高いという結果になっている。これは、企画側・参加側の立場の違いによる意識の順当な表れと考えられる。ところが、ある1つのワークショップに対するアンケートの集計結果は、これとは異なる結果となった。図6に示すとおり、「達成感」の項目では企画側が参加

側より高いのは他のグループと同じなのだが、その差が明らかに大きくなっており、さらに「援助方法」の項目では、他のグループとは逆に、参加側より企画側が高くなっているのである。この分析結果について原因を調べるため、アンケートとは別に学生が提出するレポートの記述の中から、このグループの実施したワークショップについての記述を拾い出し検討してみた。参加者の記述では「達成感」「援助方法」について不満を表明する内容の記述が見られるのだが、企画者の記述では、これらの項目の双方に満足しているという記述が見られた。このことから、図6に表れているのは、企画側の単純な自己満足が示されていると見ることができ、自分たちの行ったワークショップおよびその援助方法に対しての客観的な視点が欠けていることを物語っているものと見る事ができる。このアンケート結果の分析から、授業のねらいは、おおかた達成されていると考えられ、このような形式の授業は効果的にその成果をあげていることがわかる。ただし、限られたグループではあるが“自分達の活動に対する客観的な視点の欠如”といった問題があることもわかった。

(3) 活動の実際

ここでは、実際のワークショップの運営の中で、学生自身がどう考え、どう対応したのかを、ある1つのワークショップの実際の流れを追いながら考えてみたい。表3および写真1～4で示すのは、平成13年度に実施したワークショップの中の「ものとかかわる」のグループの活動の様子である。表3は、計画と実際の活動を比較するために、各々の時間の流れを一つの表にまとめたものである。90分の活動時間の内、計画では、約60分で制作を終え、各々のグループが製作した作品を鑑賞し、作ったもので遊ぶということを想定している。しかし、実際の活動では予想以上に制作に時間がかかり、お互いの作品を鑑賞したり、それを使って遊ぶといった時間がとれないという状況に陥った。企画担当の学生は、参加者が作品を完成させるとであろうと見込んだ60分が過ぎたあたりから、この活動のために与えられた時間内ではうまく行かないことに気づき始め、制作を急ぐように促す言葉がけを行う。しかしそれでも、なかなか思うように作品は完成に達しない。そして、教員にアドバイスを求め指示を受ける。結果的に、“鑑賞と遊び”をワークショップのために割り当てられた時間の終了後に行うことで、活動全体を“じっくりと作ることを楽しむ活動”としてまとめることになった。

この活動を通して企画担当の学生は、ものを作るという活動を“完成に向かって単に作ること”としてとらえていた間違いに気がついたと思う。完成に向かう“作る”という活動の中でも、時には脇道にそれ、遊びながら作る、言い換えれば“作ること自体を楽しむ”活動の重要性を、身を持って経験し理解したのではないだろうか。このグループのワークショップに関するアンケートの結果は図5に示したものである。「援助方法」の項目に注目すると、企画側は、計画通りに進まなかったことを反映して自分達の援助方法に満足せず、評価が低くなっている。それに対し、参加側は、“じっくりと作ることを楽しむ活動”に切り替えた企画側の援助方法にある程度の満足を示している。さらに、この図の中の「達成感」の項目での企画側の評価の高さは、計画どおりにならない中で、

表3 活動計画と実際の活動の比較

活動計画		活動の実際			
時間	活動内容予定	留意点	支持者声かけ	指導グループの動き	参加者の動き
16:00	<p>班ごとに集合</p> <p>活動の説明</p> <p>材料道具配付</p> <p>テーマ決定</p> <p>制作開始</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・10分前に集合、準備 ・説明を分かりやすいように工夫する ・時間配分を知らせる ・みんなで良く話し合っているべく早くテーマを決める ・担当者を班毎に配置 	<p>材料道具と作り方の説明「始めて下さい。5時10分までに完成させて下さい。それから採点を始めます。」</p> <p>「バルーンを作りながら手のあいた人からバルーンの飾りを作ってください。」</p> <p>「時間があまりありません、少し急いで下さい。」</p> <p>「膨らますのに時間がかかります。時間配分を考えてやって下さい。」</p> <p>「もう時間がないので55分になったら組み立てて下さい。」</p> <p>「もう組み立てて下さい。時間がないので飾ると同時進行ですめて下さい。」</p> <p>*教員にアドバイスを求める</p> <p>「時間のびてしまったので、お互いに作品を審査しあう活動をどうしたらよいか、でしょうか。」</p> <p>*教員からアドバイスを</p> <p>「時間いっぱい自由に作らせておいて、活動の後お互いの作品への投票をしてもらい、お互いの作品審査や順位の発表などは夕食時間までの自由時間にしたらどうか。」</p>	<p>準備、環境設定</p> <p>材料配付</p> <p>作品の見本を見せる</p> <p>作品見本片付け</p> <p>各グループへ、説明やアドバイスを行う</p> <p>作業しやすい環境設定に注意する</p> <p>ポリ袋の繋げ方についてのアドバイス</p> <p>足りなくなった材料を再配付</p> <p>作品のテーマや飾りの作り方についてのアドバイス</p> <p>立方体に繋げる作業のアドバイス</p> <p>バルーンへの空気の入れ方のアドバイス</p> <p>膨らんだバルーンの中に入れて飾り付けや描画を行うことをアドバイス</p>	<p>班ごとに集合</p> <p>示された見本を見て歓声をあげる</p> <p>ポリ袋のカットとゼロテープで繋げる作業</p> <p>ポリ袋が繋がってくるにつれ手持ち無沙汰の者が出てくる</p> <p>飾りを考え始める</p> <p>2年生が1年生をリードする姿が見られる</p> <p>飾りとバルーンを作る人の分担作業</p> <p>早いところは、立方体が立ち上がり始める</p> <p>作った飾りをバルーン本体につけ始める</p> <p>立方体に組上がったものに扇風機で空気を入れ始める</p> <p>バルーンの中に入っている飾り付け作業</p> <p>飾ることを十分に楽しんでいる</p> <p>ほとんどのグループが膨らみ始める</p> <p>他のグループの作品にも注意が行き始める</p> <p>出来上がったグループがバルーンで遊び始める</p> <p>最後のバルーン完成</p> <p>それぞれの作品を見て回る</p> <p>工夫したところなどを聞いたりしている</p> <p>道具類の片付け</p> <p>投票の集計が終わったところからバルーンについて遊んでいる</p>
17:00	<p>作品発表</p> <p>順位を決める</p> <p>出来上がったバルーンで遊ぶ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・各々の班の作品の良いところを言う ・ゴミ袋の準備 	<p>「最後の班が膨らんだようなので、一番良かったと思うものを今配った紙に書いて投票して下さい。」</p> <p>「他の班のを見て回ったら、自分の班にかえて投票をまとめて下さい。30分が過ぎていっているので速めにして下さい。」</p> <p>「投票の集計と後片付けが終わったところは終わりにして下さい。夕食までバルーンはこのままにしておきますのでお互いの作品を眺めたり遊んだりしてください。投票結果は夕食の時に発表します。」</p>	<p>投票用紙配付</p> <p>各グループを回りテーマを言ってもらい全体に作品の紹介をする</p>	<p>最後のバルーン完成</p>
17:10	<p>片付け</p>			<p>ゴミ袋や使い終わった道具類の回収指定</p> <p>後片付けの確認</p> <p>投票用紙回収作業</p> <p>(夕食時に結果発表)</p>	
17:20	<p>終了</p>				
17:30					

写真1 「ものとかかわる」作り方の説明



写真2 ポリ袋をつなぐ



写真3 バルーンにつける飾りを作る



写真4 出来上がったバルーンで遊ぶ



自分達なりに対処方法を見つけ、活動をまとめることができたことに対する満足感を示していると考えられる。

この事例の分析により、このような「学外・野外といった環境を生かした活動」「学生自身が、指導する側・される側を各々経験する活動」をねらいとする授業が、シュミレーションだけでなく実際に相手を動かすこと、失敗を経験すると同時にそれを補おうとする努力を経験できるものであり、そしてこのことが、学生の効果的な学習に役に立っているということが明らかになっている。

(4) 平成13年度以降の実施内容

これまで見てきたように平成13年度は、12年度までの経験を生かし、活動内容の改善はもちろん、その授業の結果を分析する方法もしっかりとしたものになってきた。その上で、平成14年度・15年度にもさらに改善を加えている。表4および写真5～8は、14年度・15年度のワークショップと活動の様子である。

平成13年度から14年度への改善のポイントは、事前準備の授業体制の変更である。平成13年度までは事前学習をすべて1・2年同じ枠で行っていたが、14年度からは、まず2年生のみ単独で2コマの事前学習を行った。2年生は、この2コマでグループに別れ、昨年の活動を振り返った上でその年にやるべき自分たちの企画を考えていくのである。したがって、1年との合同授業になる時には、活動の計画や準備の方法はすでに詰められており、その結果として、2年生は自信を持って1年生をリー

ドしていくことができるようになった。

平成15年度には、1グループあたりの人数を減らすような工夫をした。学外での活動が2日間と既に決まっているため、ワークショップの数を増やすことは難しい。そこで、表4に示したように、これまでのワークショップのカテゴリーはそのままに、活動の内容を細分化するという方法でグループ数を増やし、1グループあたりの人数を減らした。これにより、各20名程度の5グループから、12名程度の8

グループとなり、これまでのように、グループ内の人数が多過ぎて、ともすると何もしない学生が出てくるということがなくなった。

表4 平成14年度と15年度の活動内容

ワークショップ名	内 容	
	平成14年度	平成15年度
人とかかわる	伝承遊び 集団遊び 鬼退治に行こう (数集まりのゲーム) 逃げ切れ桃太郎 (2人組を作る鬼ごっこ)	コミュニケーションゲーム 数集まりのゲーム 簡単なダンス 伝承遊び だるまさんが転んだの応用 ゲームとしっぽ取り鬼ごっこ
自然とかかわる	ウォークラリー ①虫かごづくり②虫とり③歌って踊る④俳句を作る⑤俳句から連想する絵を描く	ウォークラリー (前半) ①なぞなぞ②植物さがし ウォークラリー (後半) ③歌って踊る④俳句と色紙作り
ものとかかわる	造形遊び ストロー笛、空き缶の打楽器 合奏の発表	造形遊びA 紙皿で作るUFO 造形遊びB 割り箸で作る輪ゴム鉄砲
レクリエーションを楽しむ	キャンプファイヤー レクリエーション ダンス	キャンプファイヤー キャンドルサービス レクリエーション ダンス
食を楽しむ	野外炊飯 (カレーライス、空き缶を利用したピザづくり、てんぐせりー)	
*施設スタッフによるワークショップ	草木染め体験	備前焼き (てびねり) 体験 野外炊飯

写真5 「割り箸で作る輪ゴム鉄砲」製作の様子



写真6 的当てゲームで遊ぶ

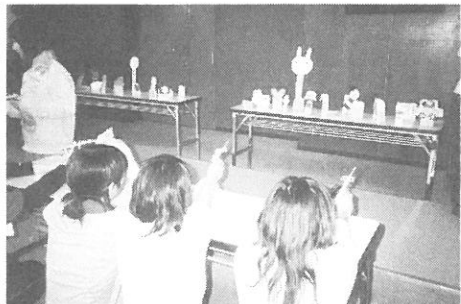


写真7 「草木染め体験」染液にハンカチを浸ける



写真8 染め上がったハンカチを乾燥させる



また、14年度まで学生のワークショップとして行っていた「食を楽しむ」については、これまで、学生のワークショップと言いながら、実質は、鍋やかまどといった設備や食材をそろえることなど、その準備の多くの部分を施設スタッフの方の助けを借りると言う状態で、なかなか学生自身がすべてを仕切るという活動にならないのが現状であった。そのため平成15年から、施設の方に全面的にお願いすることにした。

4. 考察

本論で見て来たように、「保育内容総合演習」の授業は、“自分たちで実践することと、他者の実践に参加すること”で、学習意欲、交流と協力、達成感、援助方法等様々な内容を総合的に学ぶことができる授業となっている。今日の学生たちは、実体験の不足や人間関係の希薄さを指摘されることが多い。そのような状況の中で、学生に対してこの授業で用いた教育の手法は、効果的で有効なものであると言うことは理解してもらえらると思う。学生は、この授業により、保育・教育の現場での活動に対して、実際の経験に根ざした適切な援助力を身につけることができ、充実した保育・教育実践を実現するための基礎力を養成することができる。

さらに、「学生自身が、指導する側・される側を各々経験する活動」とは単に、ワークショップを実施する際の「指導する側」「される側」ということに留まらず、事前学習から始まる、2年生が1年生をリードし、各々のワークショップの企画内容を詰め実際の活動の実現にまでもっていくという、1・2年の関係が形成されるということも重要なことである。こうした1・2年の関係は、平成15年度の内容変更で、1グループ当たりの人数を少なくしたことによって、より学生自身が意識するようになった。2年生はもとより1年生においても自分自身の責任を十分意識して授業に取り組むようになってきたのである。

現時点で、「保育内容総合演習」という授業のこれからを考えるならば、今後は、自分達の企画運営に対しての客観的な視点をいかに持たせることができるかが今後の課題となってくると考えている。これについては、次年度以降、反省会などの内容を工夫することで、自分達の企画運営に対しての客観的な視点と指導している時の柔軟な対応力を持たせるための改善を図って行きたいと考えている。

5. おわりに

本学では、本研究で取り上げた「保育内容総合演習」という科目の他に、“総合的な学習”に関係する科目として「総合表現」「総合演習」「教職総合演習」という科目をたてている。各々目的や内容は異なるものの、総合という言葉で代表される今日的な意味合いは共通しており、今後は、これらの科目を連係して効果的に運用することが必要だと考えられる。また、総合的・自主的な活動の重要性がいわれる幼児教育に携わるものにこそ、このような総合的・自主的な活動の力を身に付ける必要があるという考え方から、学生自身が、総合的・自主的に学ぶことを行う科目に加え、

そうした総合的な科目を指導するための方法や指導する経験を積むようなことを目的とする授業も必要であると思われる。

今後は、短大や大学のような高等教育の場での“総合的な学習”について、本学での「保育内容総合演習」の実践から考えるとともに、総合的な学習・活動を子どもたちに対して実施できる学生を育てるために、教員養成課程や保育士養成課程における「自発的な体験学習」「総合的な学習」をねらいとした授業のあり方について、さらに考えて行かねばならないと考えている。

参考文献

- 1) 中野民夫：『ワークショップー新しい学びと創造の場ー』、岩波新書、2001年
- 2) 佐伯胖・藤田英典・佐藤学：『学びあう共同体』、東京大学出版会、1996年
- 3) 星野敏男・川島直・平野吉直・佐藤初雄：『野外教育入門』、小学館、2001年
- 4) ウド・リーベルト：『芸術あそび』、日本文教出版、1996年
- 5) 新山順子・関崎哲：「保育学生の自ら学ぶ力を養成する体験学習の可能性」、『岡山県立大学短期大学部研究紀要第10巻』、岡山県立大学短期大学部、2003年

2003年10月31日受付
2003年12月25日受理